

現代日本語に於ける「さあ」の意味用法について

池田 諭

東パリ大学(マルヌ・ラ・ヴァレ)、ジュール・フェリー高校(クロミエ)

要旨

「さあ」は感動詞とされその意味用法には主に勧誘・促しが続く用法、期待した状況や予定された状況が続く、所謂「時機到来」の用法、意志・義務が続く用法の3種とそれから当惑の用法が2種考えられる。この内で前者の3種は「新しい状況・動作・行動への移行」で関連付けが可能であったが、当惑の用法は同様の方法では無理があったように思われる。そこで本稿では発話理論とトポロジーからなる仮説を提出する。「さあ」は基本的に状況・文脈で作られる概念Pの補充概念C(P)に対して「駆け回り操作」をし、C(P)を閉め、改めて概念Pを開く操作とし、これを基に当惑の用法に対しても有効な統一的な記述を提案する。

【キーワード】 概念、トポロジー、機能的不変体、文脈変化

1 はじめに

「さあ」は異形態として「さ」を持ち、品詞としては感動詞を示す基本語である。これは、日本語初級でも現れ、次の分類の中に見られる様々な用法が観察される。これらの用法で「さあ」は果たして同一だろうか。同一性を問題にするのは多義語もしくは同音異義語によって生じる習得上の煩雑性を回避したいという教育的理由が第1にあり、更に思惟の経済性という認識論的方法論的理由が第2にあるからである。この2つの立場は分野は別でも密接に繋がっていると思われる。本稿では始めに「さあ」の代表的な意味用法を体系的に分類整理する。その後、先行研究の批判的紹介並び教育的観察・考察を経て、分析となり、機能的不変体を抽出した仮説を示す。そしてこの仮説を基に代表的な意味用法を記述する。最後に分析結果からの日本語教育と間投詞用法の分析への応用可能性を考える。

2 観察される「さて」の意味用法の分類

2.1 語源

感動詞としての「さあ」/「さ」は共に「さあ」/「さ」からの派生であり、間投詞も同様であることから2者の同一性が疑われるところであるがここでは感動詞を扱う。

2.2 分類

広がりを持つ「新しい状況・動作・行動への移行」の用法と広がりを持たず認識に関する文に限る「当惑」の2種に分けられる。

2.2.1 「新しい状況・動作・行動への移行」

後続文での対他性、時間性、主観性の有無によって3部に下位区分される。

2.2.1.1 「勧誘・促し」

聞き手との関係(対他性)で発生する。相手に動作・行動を誘ったり促したりする。「勧誘・促し」を示す表現は「さあ」に後置し、述語で表すのが一般的である。この用法は森山・張(2002)では「動作発動用法」と呼ばれ動作発動を誘発させる機能と見る。

(1) {さあ/Ø}、{食べください / 食べましょう}

また繰り返しが可能である。

(2) さあ、さあ、{食べください / 食べましょう}

否定形に典型的な制限が見られる。

(3) さあ {*食べるな / *食べないでください}

述語以外でもこの用法が見られる。「促し/勧誘」内容は発話状況で補われる。

(4) さあ {どうぞ / 奥へ}

更に簡略化し、消去される。呼びかけに近い。

(5) さあ Ø。

2.2.1.2 「時機到来」

森山・張(2002)の命名による。聞き手との関係なしで可能であり、期待した状況や予定された状況への移行を表示する。新状況は「さあ」に後置し、述語で表示される。この後更に発話者の主観・意志を伴う文が後続するのが一般的である。

(6) さあ、今日から夏休みだ。思いっきり遊ぼう。

(7) さあ、宿題が終わった。遊びに行こう。

(8) さあ、東京に 着く。早く荷物の準備をしなくっちゃ。

この移行は時間的継続性を帯びていると思われる。

(9) さあ、やっど 今日から 夏休みだ。思いっきり遊ぼう。

(10) さあ、やっど 宿題が終わった。遊びに行こう。

(11) さあ、{ようやく / そろそろ} 東京に着く。荷物の準備をしなくっちゃ。

繰り返しに制限があるようである。

(12)?? さあ、さあ、 今日から夏休みだ。思いっきり遊ぼう。

否定形にも典型的な制限が見られる。

(13)?? さあ、宿題が終わらない。まだ 遊びに行かない。

述語以外では不可であり、「時機到来」内容は発話状況で補われない。

(14)?? さあ やっど。早く荷物の準備をしなくっちゃ。

同様に「時機到来」内容の消去も不可能と思われる。

(15) * さあ Ø。 思いっきり遊ぼう。 ≠ (15)' さあ、思いっきり遊ぼう。

2.2.1.3 「意志 / 義務」

聞き手との関係なしで成立する。「さあ」に後置し、発話者の主観的「意志 / 義務」は述語で表示される。ここでは(6)(7)(8)からの次の変化を観察されたい。尚、森山・張(2002)では動作発動を誘発させる「動作発動用法 / 意志」に相当する。

(16) 今日から夏休みだ。{さあ/Ø}、思いっきり遊ぼう。

(17) 宿題が終わった。{さあ/Ø}、遊びに行こう。

(18) 東京に 着く。{さあ/Ø}、早く荷物の準備をしなくっちゃ。

「時機到来」と違いここでは時間的継続性は観察されない。それ故に(6)(7)(8)と合わせて2つの「さあ」の共起が考えられる。

(16)' さあ、今日から夏休みだ。さあ、思いっきり遊ぼう。

(17)' さあ、宿題が終わった。さあ、遊びに行こう。

(18)' さあ、東京に 着く。さあ、早く荷物の準備をしなくっちゃ。

繰り返しに制限があるようである。

(19) 今日から夏休みだ。?? さあ、さあ、思いつき遊ぼう。
否定形にも典型的な制限が見られる。

(20) 今日から夏休みだ。* さあ、絶対に遊ばないぞ。
述語以外では不可であり、「意志 / 義務」内容は発話状況で補われない様である。

(21) 今日から夏休みだ。?? さあ 思いつき。
同様に「意志 / 義務」内容の消去も不可能な様である。

(22) 今日から夏休みだ。* さあ Ø。

2.2.2 「当惑」

後続文は発話者の認識に関する文に限る。対他性の有無により 2 部に下位区分される。

2.2.2.1 「当惑 1」

聞き手との関係 (対他性) で成立する。相手の質問に断定的判断・返答が不可能な時に発する。森山・張(2002)では「留保表示法」に相当する。

(23) A: 山田さんは いつ着きますか。

B: {さあ / Ø / ??えーと} {分かりません / 知りません / いつでしょうか}

(24) A: 山田さんが いつ着くか 知っていますか。

B1: {さあ/Ø}、{分かりません / 知りません / いつでしょうか}

B2: Ø いいえ {分かりません / 知りません / いつでしょうか}

B3: *さあ、いいえ {分かりません / 知りません / いつでしょうか}

繰り返しに制限があるようである。

(25) A: 山田さんは いつ着きますか?

B: ?? さあ、さあ、{分かりません / 知りません / いつでしょうか}

肯定形に典型的な制限が見られる。

(26) A: 山田さんが いつ着くか 知っていますか。

B1: * さあ、{分かります / 知っています}

B2: Ø はい、{分かります / 知っています}

B3: * さあ、はい、{分かります / 知っています}

述語以外でも可能であり、「当惑」内容は発話状況で補われる。

(27) A: 山田さんは いつ着きますか。 B: さあ、{全く / 今のところはいつ}

更に簡略化し、消去が可能である。

(28) A: 山田さんは いつ着きますか。 B: さあ Ø。

2.2.2.2 「当惑 2」

聞き手との関係なしで成立する。ある状況で問題が発生し発話者は直ぐ解決が出来ない時に発する。

(29) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。

{さあ/Ø}、困った。どうしよう。

繰り返しに制限があるようである。

(30) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。

?? さあ、さあ、どうしよう。

肯定形 / 肯定的概念で典型的な制限が見られる。

(31) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。?? さあ、大丈夫だ。

述語以外では制限を受ける。「当惑 2」内容は発話状況で補われないようである。

(32) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。

?? さあ、{本当に / 全く}。

同様に「当惑 2」内容の消去も不可能と思われる。

(33) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。*さあ、∅。

3 先行研究

辞書の記述は編者により分類は様々であるが、「勧誘・促し」と「当惑」が一定して見られる。鷹野 (2004) は外国人への日本語教育上、「勧誘・促し」、「新状況への移行」、「当惑」を区別するが言語学的記述は少ない。森山(1996)には感動詞の分類があり、「当惑」の「さあ」は対他的感動詞—応答詞系—対認識文応答文—留保表示—疑問への即時回答不能表示、「勧誘・促し」の「さあ」は、非対他的感動詞—動作実行連動系 (必ず現実世界での動作実行に連動) —動作発動類 (動作を促す)と体系的な位置付けがある。森山・張(2002)では「動作発動用法」「留保表示用法」の 2 用法に更に「時機到来用法」を加えて 3 種の「さあ」を立て、「動作発動用法」と「時機到来用法」を「状況が動作発動を含む段階に更新」で捉えながら 3 種の用法を統一を試みたが、「留保表示用法」即ち「当惑」への関連付けに無理があるように思われる。また「当惑」の後続文が認識文に限ると言う重要な制限も説明されていない。これらの諸研究を踏まえて新たな記述が望まれると思われる。

4 教育的観察・考察

「さあ」は初級でも極初期に見られる。例えば普及度の高い『みんなの日本語』(1998)では以下に観察する様に「勧誘・促し」が初めに導入され、「当惑」がその後続く。

(35)A: さあ、会議を 始めましょう。あれ? ミラーさんは?

B: 今 電話を かけています。

A: そうですね。じゃ、ちょっと 待ちましょう。 [みんなの日本語 14

課]

(36) 山の高さはどうやって測るか、知っていますか。

...さあ、どうやって 測るんですか。 [みんなの日本語 40 課]

ここでは両者の意味的差は大きく学習者は各用法を個別に捉えてもこの段階では問題は生じないが、よくある次の会話はどうか。

(37)A: さあ、(皆さん) どうでしょうか。 B: さあ、どうでしょうか。

同形から単なる繰り返しのように見えるが、2 者の意味は曖昧性が全くなくその差は歴然である。ここでは各用法を個別に立てる上の方法は余り役に立たないと思われる。学習者には果たして「さあ」は本当に別々なものだろうかと言う多義性に対する素朴な疑問すら生じるだろう。教育的にも用法間の有機的な説明が望まれるところであると考えられる。

5 分析

5.1 概念装置と仮説

発話理論とトポロジーを基にして概念装置を次の様に定めよう。発話者を S0、聞き手を S1、発話時を T0 とし必要に応じて T1、T2、...、を T0 を基準にして作る。

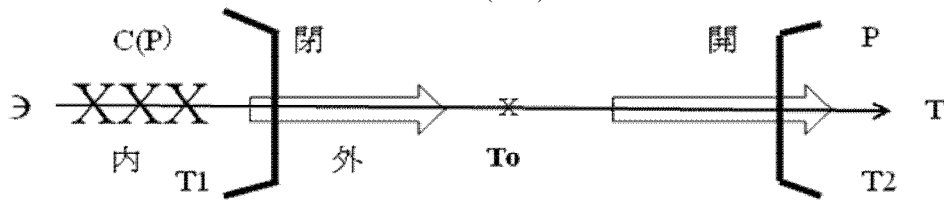
状況・文脈で作られる(状況、述語) 概念を P とし、その相補体を C(P) とする。トポロジ的空間は内、外の区別があり、その境界は開いたり閉じたりする。尚 ϵ 、 \exists は関係構築オペレーターである。以上を基にして「さあ」の一般操作を次の仮定で示そう。

(38) 仮説: 「さあ」の一般操作

発話時 T_0 から発話者 S_0 は次の操作を行う。第 1 時点 T_1 ($T_1 < T_0$) に設置された補充概念 C(P) に対して「駆け回り操作」をして、C(P) を閉め、それから第 2 時点 T_2 ($T_0 < T_2$) に設置された概念空間 P を新しく開く。 $T_1 < T_0 < T_2$ であり、補充概念 C(P) は後続文または状況・文脈で作られる。P 及び C(P) の作られ方によって表面上の意味が分かれる。

これを次に図示する。尚「駆け回り操作」は XXX で図示される。

(図 1)



5.2 記述・説明

紙幅上、全用法を分析出来ないが、仮説を基に幾つかの代表的な意味用法を記述しよう。

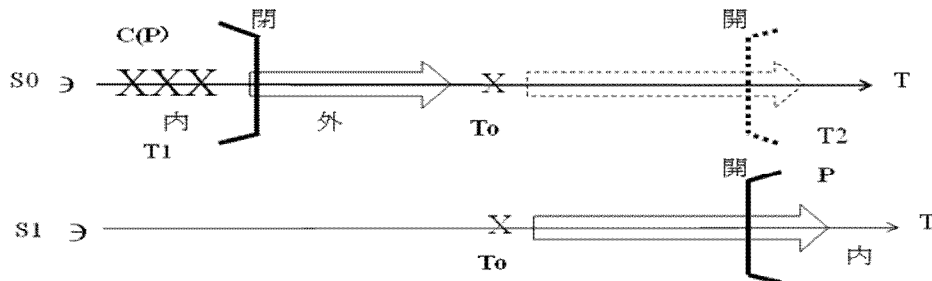
5.2.1 「勧誘・促し」

(39) (1) {さあ/∅}、{食べください / 食べましょう}

P を「食べる」と置くと、C(P) は「食事の準備」と置ける。P は発話者 S_0 が聞き手 S_1 に求める「新しい動作・行動」である。この性質が「勧誘・促し」の基になる。 T_1 で C(P) が終了してから(C(P) を閉めて C(P) の外に出たら)、発話者 S_0 が聞き手 S_1 に、 T_2 で P を始める(P を開けて P の内に入る) 様にと発話時 T_0 に求めると解釈される。

ここでは T_1 では P は不成立であり、 T_2 で P は成立となる。P の成立に際は発話者 S_0 に依らず聞き手 S_1 に依る。また「駆け回り操作」はここでは「食事の準備」の行程であり、図では XXX で図示される。以上を次に図示する。

(図 2)



ここで「さあ」を消すと C (P) がなくなり、発話者 S0 から聞き手 S1 への単なる P の構築の要請となる。

5.2.2 「時機到来」

(40) (6) {さあ/∅}、今日から夏休みだ。思いっきり遊ぼう。

P を「夏休みだ」、C(P) を「夏休みを待つ状態」とする。P は期待した状況や予定された「新しい状況」である。この性質が「時機到来」の基になる。T1 では C(P) が終了する(C(P) を閉めて C(P) の外に出る) ことで学期の終わりが、T2 から P が始まる (P が開き P の内に入る) ことで夏休みの到来が示される。

ここでは T1 では P は不成立であり、T2 で P は成立となる。P の成立は発話者 S0 に依らず時間に依る。これがこの用法での時間的継続性を作り、文脈により {いよいよ / ようやく / そろそろ} 等での置き換えまたは共起を可能にすると考えられる。

また「駆け回り操作」はここでは「学期末で夏休みを待つ状態」の行程であり、図では XXX で図示される。以上から「時機到来」の意味が説明されると思われる。(40)(6) で「さあ」をとると、C (P) がなくなり、単なる夏休みの開始と告げる文となる。

尚 P のここでの性質により、期待されない事項や予定外の事項や時間的継続性を帯びない事項はこの構築には入れない。このことから次の制限が発生すると思われる。

(40-a) {??さあ/∅}、地震だ。どうしよう。

5.2.3 「意志 / 義務」

(41) (16) 今日から夏休みだ。{さあ/∅}、思いっきり遊ぼう。

ここでは(40)(6)からの変化である。P を「思いっきり遊ぼう」とすると、C(P) は「思いっきり遊べない」となる。P は質的には「新しい動作・行動」であり、これが「意志」の基になる。T1 は P が出来ない「夏休み以前」であり、C(P) を閉めて外に出て、T2 から P が開き P が可能となる。以上から「夏休み以前は思いっきり遊べない状態だったが、今日から夏休みなので、この状態を閉めて思いっきり遊べる状態を開きたい」と解釈される。

ここでは T1 では P は部分的に成立し、T2 で P は最大成立となる。P の成立は発話者 S0 に依る。

尚(41)(16) は (40)(6) に近い様に見えるが P の性質は全く異なっている。前者は P の質的变化が問題になっているのに対して後者では時間的変化が問題になっているからである。それ故、{いよいよ / ようやく / そろそろ}での置き換えも共起も不可能となる。

(41)(16) で「さあ」を消去すると、C (P) がなくなり、P の質的变化は明確ではない。

5.2.4 「当惑 1」

(42) (23) A: 山田さんは いつ着きますか?

B: {さあ /∅/?? えーと} {分かりません/知りません/いつでしょうか}

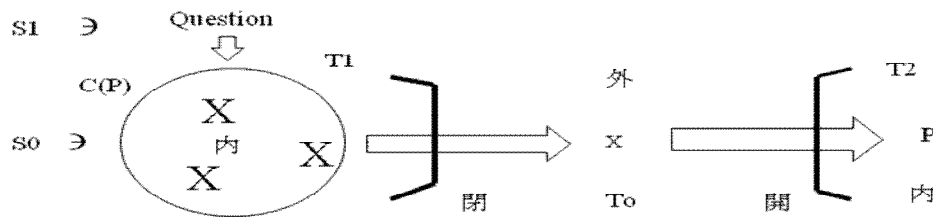
話者 A の質問に対して話者 B がする返答の仕組みを見る。話者 B は回答の可能性として考えられるあらゆる要素を集める。これは「分かる」「知る」の可能性を秘めている集合でありこれを C (P) とする。すると P は C (P) 「分かる」「知る」の外であるから「分からない」「知らない」に当たる。

ここでは P は「新しい状況」に類した概念には無関係である。この点で森山・張 (2002) と立場を異にする。

仮定に沿って各々の時間を T_1 、 T_2 、($T_1 < T_0 < T_2$) とすると、先ず話者 A の質問に対して話者 B は T_1 での $C(P)$ で「駆け回り操作」XXX を行う。これは集合の中での回答の模索である。その後 $C(P)$ を閉めて $C(P)$ の外に出る。これは話者 B が回答を見出せず、仕方なく P 「分からない」「知らない」に移ることである。「当惑」は認識可能性の $C(P)$ から認識可能性の否定性の P への移行で作られるのである。

尚ここでは T_1 では P は未定であり、 T_2 で P は決定となる。 P の成立は発話者 S_0 に依る。以上を次に図示する。

(図 3)



(42)(23) で「さあ」を消去すると、 $C(P)$ も「駆け回り操作」もなくなり単なる否定的回答でしかなくなる。

(42)(23) で「えーと」は制限を示す。「えーと」では模索の「駆け回り操作」が続き外に出ない為、{分かりません/知りません/いつでしょうか}等で受けられない為に不文となると考えられる。

5.2.5 「当惑 2」

(43) (29) {道が 2 つに分かれている / ご飯が足りない / 台風が来る}。

{さあ/〇}、困った。どうしよう。

ここでは発話者 S_0 がある問題に直面する状況である。この問題に対して考えられるあらゆる「問題打開策」を発話者 S_0 が考えるが、これが $C(P)$ である。 P は $C(P)$ の外で、「問題打開策の欠如」の状態に相当し、「困った。どうしよう」で表現される。各々に T_1 、 T_2 、($T_1 < T_0 < T_2$) で時間を割り当てて、「当惑 1」と同様な組み立てで「当惑 2」が説明される。1 と 2 の違いは対他性の有無に依る。「さあ」を消す場合も同様である。

5.2.6 まとめ

「勧誘・促し」「時機到来」「意志 / 義務」と「当惑 1」「当惑 2」の 2 種の用法の根本的違いは肯定的 P と否定的 P から来ると思われる。この違いは(3)(13)(20)での制限と(26) B1、(31)での制限を生む。尚 $C(P)$ から否定的 P への移行を可能にするのは認識に関する述語に限るが、これはこの種の述語が持つ「駆け回り操作」での瞬時に拠っていると考える。

6 結論 日本語教育への応用とこれからの課題

離れていた用法が仮説(38)で有機的に繋がり統一的に記述されたが、これによって「さあ」は単なる多義語でも同音異義語でもなく、機能的に同一な不変体であることが示されたと思われる。また本稿で扱わなかった他の用法も同様に説明されると

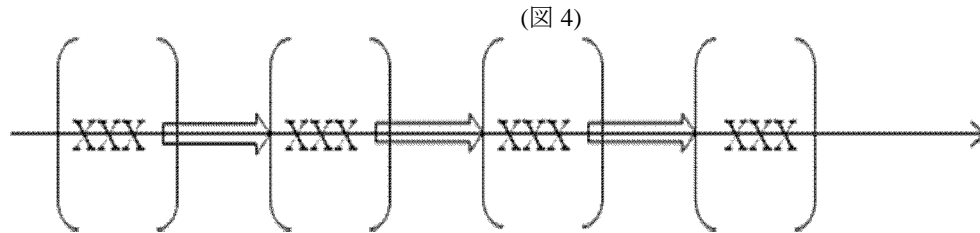
考えたい。

ここで『みんなの日本語』の例文(35)(36)を通して日本語教育への具体的応用を考えよう。(35)ではPは「会議を始める」、C(P)は「会議に準備」であり、これで(35)の「勧誘・促し」が説明される。これを基にして(36)ではPは「山の高さのはかりかた」、C(P)は「知らない」、即ち「どうやって 測るんですか」と変換すれば「当惑」への変化も統一的に説明される。また(37)での繰り返しも同様に分かりやすく説明されると思われる。この様にする事で習得上の煩雑性を回避でき、記述もより少なくなり、即ちより経済的になり、教育的効果も高まると考えたい。

最後に語源的にも同一性が考えられる間投詞への応用可能性の示唆しよう。次の例文を見られたい。

(44) 私さあ、明日さあ、友達とさあ、一寸さあ、出かけたんだけどさあ、いい?

ここでは句を単位にして「さあ」が係り、句と句を繋いでいる様に考えられる。即ち、「さあ」は前の句を閉めながら、続く句を開き、これによって句間を繋いでいると考えたい。この様子を次に図示する。



この連結の仕方は仮説(38)での C(P)から P への移行を似ている様に思われる。しかし(38)では概念 C (P) と概念 P の間は P で繋がっていたのに対して、間投詞の場合は句間にはこの様な繋がりが見られない。更に「駆け回り操作」がどの様に働くのかも不明である。仮説(38) から間投詞を捉えるにはこの仮説の更なる一般化が必要になると考えられるが、これはこれからの課題としたい。

<参考文献>

- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」、『語文』第.65号, 大阪大学国語国文学会。
森山卓郎・張敬茹 (2002) 「動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって 一日中対照的観点も含めて一」、『日本語文法』第2巻2号, pp.128-143, 日本語文法学会。
CULIOLI (Antoine) (1981) « Sur le concept de notion », *BULAG* 8 :62-79.
POTTIER (Bernard) (1962) *Systématique des éléments de relations*. Paris: Klincksieck.
SVEDELIUS (Carl) (2010) *L'analyse du langage appliquée à la langue française*. New-York : Nabu Press.

日本語教科書

- 『みんなの日本語 初級本冊 1』 (1998) スリーエーネットワーク
『みんなの日本語 初級本冊 2』 (1998) スリーエーネットワーク

辞書

- 『外国人のための楽しい日本語辞典』(2004) 鷹野次長[編]三省堂
『現代語から古語を引く辞典』(2007) 芹生 公男 [編]三省堂
『広辞苑』(1998) 岩波書店 第4版
『国語大辞典』(1981) 小学館 第5版
『古語林』 (1997) 安藤 千鶴子、林 巨樹 [編] 大修館
『詳説古語辞典』(2000) 秋山 虔 渡辺 実[編] 三省堂
『全訳基本古語辞典』(2005) 鈴木一雄 [編] 三省堂
『大辞林』(1995) 三省堂 第2版